

**離島ならではの
保健医療サービスを学ぶ**

その答えを導くのは、「公衆衛生

10月中旬から3週間、沖縄を訪れたのは、ミャンマー保健省の職員たち。「山がちで道路も整備されていないため、遠隔地まで保健医療サービスを届けるのが難しいです」。国家マラリア対策プログラムを担当するキン・ナン・ロクさんは、そう自国の課題を話す。日本最南端の町、竹富町に属する西表島も、島に渡る交通手段は石垣島からのフェリーのみ。約40の離島を抱える沖縄は、遠隔地で保健医療サービスをどのように提供し、修員たちが一番学びたかったことだ。



波照間島が見える海岸の岩に、ひっそりと刻まれた「忘勿石」。過去を忘れず、未来に生かすことを誓う

看護婦」という沖縄独自の制度。かつて離島の無医村に駐在し、地域に根差して感染症予防や母子保健の改善に取り組んだ。研修では「公看さん」の経験者も講師として過去の経験を伝えている。終戦直後に奮闘した彼女たちの声は、何よりも研修員の心に響くからだ。そして現在も、地域に寄り添った仕組みは健在だ。西表島東部の大富保健指導所で迎えてくれたのは、岸上奈実子保健師。島の人口約2300人の半数が住む東部地区は、高齢化や核家族化が進む。お年寄りの健康を守り、妊産婦を支えるのが岸上さんの仕事だ。「西表島には産婦人科医がいな



「あしながおばさんの会」は、銘苅さんと地域のリーダーが立ち上げ、住民自身を楽しみながら活動が続いている

いたため、36週を迎えた妊婦さんには出産に備えて石垣島に移ってまいります。その交通費や滞在費の一部は、町が補助しているんですよ。西表島ならではの取り組みに、研修員たちは驚いた様子だ。産婦人科以外の病気やけがの治療は、島に2つある診療所で医師が担当し、急患は石垣島の沖縄県立八重山病院に海上保安庁のヘリで搬送する。遠隔地で保健医療サービスを充実させるには、さまざまな組織をつなぐ体制が必要なのだ。しかし途上国では、地域の診療所の情報が自治体と共有できていないことが多い。研修員たちは「この連携こそ、今、最も必要だ」と岸上さんの話に熱心に耳を傾けていた。そして、銘苅さんはこう強調す

る。「地域の健康を守るには、住民自身の行動が何より大切です」。そこで訪れたのは、東部地区で26年間活動続けるボランティアグループ「あしながおばさんの会」。月2回、地元の「おばあ」たちが集まる機会を設けている。この日も30人ほどが折り紙をしたり歌ったりと楽しそう。参加者の多くは80代後半から90代。しかし、信じられないほどみんな若々しい。この活動が元気の源だという。研修員たちも身ぶり手ぶりで交流し、一緒に踊る場面も。「言葉が通じなくてもお互い分かり合えるねえ」「人が集まると踊り出すのはこもミャンマーも一緒。他人とは思えないよ」。研修員の訪問に、おばあたちもうれしそう。保健省管理局のソウ・タンダー・ミンさんは、「地域をつなぐ仕組みの大切さ、行政が果たすべき役割の大きさを沖縄で実感しました。母国の人々のために、一歩ずつ進んでいきたい」と決意を話してくれた。

[右]1960年代、乳幼児健診を行う公衆衛生看護婦
[左]1970年代に保健師として薬国島や西表島に駐在した銘苅さん(左)。「当時は島に医師がいなかったので責任は重大でした」



沖縄県

伝えなければ
ならない過去

波打ち際を歩くと、さくさくつと音が立つ。足元は砂ではなく、サンゴ礁のかけら。日本にいなから南国気分を味わえるのは、東京から南西に2000キロ離れた西表島ならではだ。

「この文字が見えますか？」

海岸近くの大きな岩のそばで声を掛けてきたのは、公益社団法人沖縄県看護協会の銘苅辰美さん。そこに掘られていたのは、「忘勿石」の3文字だ。「太平洋戦争末期、米軍の上陸を恐れ、波照間島など周辺の島々の住民は、もともとマラリアが広まっていた西表島に強制的に疎開させられました。それにより多くの人々が亡くなったので、戦争マラリアの悲劇を忘れるな、という意味がこの文字に込められているのです」。



遠隔地の 全ての人を健康に

日本で唯一の亜熱帯地域で、かつてはマラリアに苦しんだ沖縄県。それを乗り越えるカギとなったのは、離島ならではの保健医療サービスだ。全ての人々が健康に暮らせる社会を目指し、沖縄の経験を広めている。



「ミャンマーでも母子健康手帳が全てのお母さんに使われるといいですね」と研修員と話す銘苅さん(右端)



大富保健指導所に駐在する岸上さん(右端)から、西表島の保健医療サービスを学ぶ

写真(左ページ下2枚を除く) = 今村健志朗(フォトグラファー)